きは只だ黑きものとより見へざるべし。色彩無くば美術は實に淋しかるべし。人生より色彩を除き。野も山も花も草も皆一色とならんには之れ豈に慘憺たる光景ならずや。色彩を樂しむは人生の快事なれば。之が研究を困難なりと思はんよりも愉快なりとなすまで色を使ひ慣るべし。人の色彩の性能を啓導開發することは畫家の務めにして。世には多忙に紛れて一向に色彩の美を心に留めざる人も尠なからざれば。我之れを人に現はすことを得るよう先づ進んで研究せざる可からず。

好き風景は形狀の美と色彩の美と相合して現はるゝものなり。一致融合せる色彩は常に美しく。又た其美しき色彩のため物の形は益々趣を加へ。其形彌々好ければ其色益々引立つべし。古大家の言に聖母の像を土にて畫くことも難からず之れが周圍に塗るべき色彩あらば足れりとあるも皆此理なり。

相隣接したる二色の視神經をして滿足せしむるとき、其二色を稱して相調和する色といふ。されば色の調和とは各色の配列が眼に映ずる際、其印象吾人に愉快の感を與ふるものにして、幾多の異樣なる諸色及び反對の諸色がよく相協和して美學的溫和なる統一を得るにより目的を達せらる

補色の對比は固より調和すと雖も、同じ溶度同じ量を以てするときは强硬に且喧騷の感ありて溫和なる調和を得難し。故に補色は直接に相隣るはよろしからず。即ち補色の結合は、互に澄み且强むるものなれば、甚だ見榮ありて煌々たる或は强烈なる効果を望む時はよけれど、常に視神經兩者の間に休みなく浮動して忽ち厭倦の念を生ずべし(水彩畫階梯、色の調和)